授業のメドがついた

総長　春日井　薫

機動隊の導入による封鎖の解除は極力避けたかった。封鎖した者が反省して自主的に解除するのが一番望ましいのだが、それも期待出来ない状態であった。一般学生の動きも活発でなく、一部の学生による各方面への多大な被害を考えると、これ以上の猶予は許されないと判断した。やむをえず国法に従って警察に力をかりる結果になってしまった。

本学の場合は全学的な協力体制ができあがっており、各方面でいろいろ論議されたうえで、学長・理事会に機動隊の要請など一任されていた。本学を拠点として増々エスカレートする過激派学生の行動に、教職員の中でも、このような状態にそろそろ辛抱しかねるといった空気が強まっていた。民主的に話し合いを行なおうとすれば妨害行動にでるし、強い決心をせまられていたのであった。

これでようやく授業再開のメドはついたといえよう。出来るだけ早急に構内の整備をはかり、授業ができるような環境をとりもどして、心ある多くの学生を安心させたい。無事、四年生を来春に卒業させなくては社会にも迷惑をかける結果ともなる。卒業生を間違いなく送りだすためにはあらゆる措置を講じたい。しかし、校舎内の荒廃ぶりは目に余るものがある。特に他大学生が使用していた所はひどいものだ。

もし本学での授業が不可能の場合は、他の場所をかりてでも行なうつもりだったが、どうやらその心配はなさそうである。改革準備委員会では、若手の教員が中心になって新しい大学の在り方、大学像を求めて慎重に審議をかさねているようだが、大いに活発な討論を重ねてもらいたい。本学の五〇〇億の財産を中心に教育を行なう責務が、われわれには負わされている。

わたし自身もいろいろ抱負を持っているので、今後ともどしどし発言して本学のために尽力したい。人の頭のハエばかり追うことなく、自分自身のことを深く見つめて反省することも必要であると思っている。

（商学部教授）

"両中執"と話し合う

学務理事　木下　半治

学生大会でストライキを可決した時の賛成率は、確か六〇%ぐらいではなかったかと思う。それも小数の人の選挙で決定されたことで、三万余を擁する本学全学生の大多数の意志を反映はしていない。しかし、大学当局としては一応話し合い路線で行くことを方針としていたので、実力でバリケード封鎖を解くことはこれまで遠慮していたわけである。話し合いのいい機会であった教職員集会や、四日の全学集会も全共闘派学生によって粉砕された。それ以前までは当局は話し合いの姿勢を持っていたのだが、この時点では実力による排除も仕方がなかった。学生はあまりにも性急すぎた。これまで各学部教授会も粉砕されたが、教授会は大学を構成する基本的な組織であるため教授会が粉砕されたのでは、話し合いはできないのが当然である。一方、大学当局としては学生の「粉砕」という声におびえすぎたという感がしないでもない。勇気が少し足りなかったのではないかと思っている。たとえ粉砕されたとしても、その接点まで、何とか努力すべきであった。

今般の機動隊は導入というよりも、押し切られたという感じであった。すでにご存知の通り、十数回にもわたって、警視庁から要望書が届いており、大学としても市民の声に決断せざるを得なかったようだ。

財政問題は、学生が考えているより、もっと深刻な問題だ。借金も多いし授業料もほとんどストップしている。その上校舎の損害もひどい状態だ。手離しの楽観は許されない。他大学では教職員の給料が三割減となったことも聞いているが、本学はその一歩手前と言ってよかろう。

今後の交渉相手はやはり合法的な機関である学生会・学苑会中執にしたい。話し合いは全共闘ともするが、中執を媒介として、その意見を汲み上げてやりたいと思う。また、あるいは各学部ごとに別れて話し合いを持つこと、話し合いの多元化が考えられてもいいと思うし、そのケースもありうるだろう。

「粉砕」という言葉は、これは個人的な考えであるが、「よくする」意味の学生用語だと考えたい。粉砕が文字通り"解体"を意味するのであれば、話しにはならないが、私としては少なくともそうは思いたくはない。

（政経学部教授）

「怒り」をもって抗議

学生会　両川　敏雄

われわれが提示した問題に対して、何ら真剣な対応を全くみせず、さらに「加藤東大近代化路線」の踏襲に過ぎぬ改革準備委員会なるものも、大衆の前に公開することなく、秘密裡に作業を進め、しかも改革委案なるものも明らかにされていない段階において、機動隊導入による大学当局の反動的なロックアウト策動でもって、闘う全共闘に攻撃をかけてきたことに怒りを持って抗議する。この犯罪的な行為は決して忘れないし、絶対に許すべからざることである。

この事態は、明らかに大学当局が、警察権力イコール国家権力を一体となってわれわれの闘争を治安的発想のみで圧殺してきたものである。偽瞞的かつ犯罪的な中教審大学のヒナ型のような当局の処置に対して徹底的な闘いを展開していかねばならないだろう。同時に、一〇・二一、佐藤訪米阻止にむけて、明大全共闘の再編強化を行なっていくなかで、単に個別学園闘争にとどまることなく政治闘争の次元まで闘いを質的に高めていかなければならないだろう。

全国全共闘の下に圧倒的な学友を結集し、大デモを繰り拡げてゆく。一〇・一〇の二〇〇〇人にのぼる本学の学友諸君の結集をみて、さらに自信が強まった。この力をもって今後対当局に対する抗撃を行なって行きたい。

大学解体、総反乱を勝ち取る運動を展開していくと共に、七〇年安保、帝国主義的再編に対しては、全国全共闘で断固闘い抜く覚悟だ。

物理的に高いヘイをめぐらし、われわれの分断工作をはかろうとも決して負けはしない。同じ理想をもってともに闘い抜く者の心の絆はどんな攻撃をも打ち破る鉄の団結といえる。

われわれは止むことなく闘い続けるし後から続いてくる部隊を信じて、どんな恫喝も恐れず進んでいく。

（学生会中執委員長・政経四年）

"国家権力"の足かせ

学苑会　炭谷　久雄

大学当局による機動隊の導入・ロックアウトは、非常に強い憤りを感じるばかりでなく、行動上の面においても正直なところ痛い。活動拠点を失なったということは悲憤にたえない。

これは治安・警察当局の、これ以降の過激な行動を防ぐための足かせのつもりといえよう。ということは、大学側の要請なくして、国家・警察権力の自主的なロックアウトであると思われる。それにもかかわらず、大学当局が機動隊を導入したのは大学の意志であるといっているのは欺瞞的であり、われわれは、この背景を正確に見抜かなければならない。そして、大学当局を断固徹底的に弾劾し追及してゆかなければならない。

去る四日の全学集会には学生が六〇〇人しか集まらなかった。大学側はショックを受けただろうが、われわれも自己批判をしてゆかねばならない。しかも、今回のロックアウトに関しほとんどの学生が不信を抱いているのは事実である。

われわれは個別明治における階級闘争をたたかい抜く過程で総括し、七〇年代の階級闘争を勝ち取って行かねばならない。そのためには、いくらロックアウトが痛いからといってじっとしているわけにはゆかない。われわれはロックアウトを乗り越える闘争を展開し質的向上を計り、今後の闘争を行なっていかなくてはならない。

十月の戒厳令下におけるデモ規制、それに加えてロックアウトとしつようまでにわれわれを攻撃してくる権力に対し、断固としてはねのけ、これらを突破する中で闘争の勝利をめざしてがんばって行きたい。今後とも大学当局の策動と国家権力の圧制にたいし、全力をあげて粉砕すべく闘争を推し進めて行く。

（学苑会中執委員長・法四）